龍灯

第49号

発行所　大阪市史跡 龍渓禅師墓所　霊亀山 九島院
〒550-0022 大阪市西区本田3丁目4番18号
TEL 06(6583)2725　FAX 06(6583)0908

発行者　第二十五世住職　奥田啓知（智證）

お寺が栄えることは檀信徒の皆様の喜びであり

勿体ない（もったい）は世界の共通語

物のいのちを大切に！

今や「もったいない」という日本語が、世界の共通語となりつつあります。

二〇〇四年のノーベル平和賞受賞者でケニア共和国環境副大臣ワンガリ・マータイさんが、日本で知った言葉「もったいない」に心を打たれ、国連女性会議で演説し「もったいない」運動を世界的規模で展開しようと提唱されました。

マータイ女史は、「私たちの住む地球を破壊に追い込む深刻な脅威を減らすためには、資源の無駄遣いをなくし（リデュース）、使えるものは再使用（リユース）、そうでないものは再利用（リサイクル）するしかなく、これらを一言で表しているのがこの『もったいない』という日本語の言葉」だと言っています。そして「もったいない運動」を世界に広めることが、地球の環境問題を解決できる道なのだと提唱されたのです。

「もったいない」は、仏教語からきている言葉です。広辞苑によると、「物の本体を失する意」とあり、使えるものを粗末にしたり、生きる好機をみすみす失ったりする時に、よく使われます。

昔は、子供がご飯をこぼしたり、おかずを食べ残したりすると、親から「もったいない」といって叱られました。また、プロ野球など、一打同点または勝ち越しのチャンスで、期待の打者が三振したりしたとき、観客席から思わず「惜しい」「もったいない」などと呟きが聞こえます。

「もったいない」は、世の中の事々物々すべては、みな互いに持ちつ持たれつの関係でこそあれ、それ自身単独でわが本体とすべき存在ではないという仏教の基本的な考えかたを示しています。

つまり、「ものがなくなる」という物的損失を惜しむ気持ち以上に、失ったものを手にしたり、完成させたり、そこにたどり着くまでの「形には表れない大切なもの」に馳せる感謝の気持ちがあるのです。

仏教では四つの恩を説きますが、その一つ「衆生の恩」は、生きとし生けるもの、私たちを取り巻くすべてのものに対する感謝を説きます。たとえ湯や水といえども必要最小限の使用にとどめ、禅寺の食事作法にもとりいれられています。

また、「有り難い」「おかげさま」とともに「勿体ない」という日本語は、日本人の日常生活に溶け込み、「供養」といううるわしい行事を生み出しています。使いふるされた筆や裁縫の際折れた針のために供養し、塚や塔をたて、「衆生の恩」に報いてきました。

ところが今日、それらが失われているのは残念なことです。現代の日本人が忘れてしまった精神を外国人であるマータイさんに教えられたのです。

「もったいない」とは、物のいのちをわが命と同様に大切にすることなのです。

ノーベル平和賞受賞者
ワンガリー・マータイさん

仏前結婚式挙行

－前世の因縁が結実－

十月二十九日（土）新郎の穂積（ほしゃく）和尚と新婦の北井詠子（ながこ）さんとの仏前結婚式を本堂で厳粛な雰囲気のなか挙行しました。四週続いての週末の雨でしたが、場所を移しての午後からの結婚披露宴では雨も上がりました。

「雨の結婚式は縁起がいい」そうで雨が悪いことをスッカリ洗い流し、門出にふさわしいとのことでした。

仏教では結婚を、前世からの「因縁（いんねん）」ととらえています。目に見えぬ赤い糸で結ばれ、生まれるまえから「因縁」づけられていた男女がめでたく結ばれるということを、ご本尊の真前で報告するのが仏前結婚式なのです。

そして、新郎新婦の両家のご先祖さまのお位牌を安置して、いっさいの衆生への感謝と御仏の教えを導きとして二人の絆を深めことを誓い合うのです

式をつかさどる司婚師は、当院本寺の高槻・慶瑞寺住職の寺坂道雄老師さま。法類（お寺の親戚）の五人の和尚様や出入りの業者の方々の加担を頂きました。出席者は両家家族親戚の三十三人。新郎は薄緑色の顕法衣を纏い、新婦は綿帽子に白無垢の花嫁衣装で臨みました。

司婚師が仏前に、ふたりが夫婦になることを報告する啓白文を奏上したあと、新郎新婦が結婚の契りを誓う誓約文を読み上げ、「念珠授与」「指輪交換」「杯事（固めの盃）」などが厳かに行われました。

午後十二時半より、ユニバーサルスタジオ横に新設された「アルカンシエルベリテ大阪」という結婚式場で親族お寺関係者、二人の友人など百十一人が出席して披露宴（ガーデンウェディング）が盛大に行われました。

今回に結婚に際して、多くの方々より過分のお祝いを頂戴いたしました。紙面を借りてお礼申し上げます。尚、御祝儀は一部、墓地水道小屋の改築費用に使わせていただきます。

ご本尊・両家ご先祖に結婚を報告する新郎新婦

九島院の新宝物

襖絵六十二面完成

来春彼岸会で披露

平成十三年九月四日に、本堂のリニューアル工事にあわせて、桂上登画伯に襖絵六十二面の製作をお願いしてから、四年の歳月を要し、ようやく念願の襖絵が完成しました。

この襖絵は、当院ご開山龍溪禅師が鎖国のためはたせなかった「入唐し禅の本場の中国で、自己の境涯を検証する悲願」を慰めるために企画したものです。

今後、襖絵を通して禅師の遺徳を広めていく所存です。観る者を圧倒する素晴らしい出来ばえです。是非、ご覧下さい。

お寺が栄えることは檀信徒の皆様の喜びであり

改修本堂に62面の襖絵

壮麗な中国四大霊場

中国出身桂さん　日中画法織り交ぜ描く

黄檗宗別格地九島院（奥田啓知住職、大阪市西区本田三ノ四ノ一八）はこのほど、本堂の改修に伴い襖絵六十二面を新たに制作、中国四大霊場などを描いた壮麗な情景画が奉納された。中国出身で兵庫県尼崎市在住の画家、桂上登さんが、日本画と中国画の技法を織り交ぜながら描いた。

新たに制作された本堂の襖絵

襖絵の新調は、本堂の全面改修を機に計画。奥田住職が同院の開山、龍渓禅師の霊を弔い遺徳を広く知らせようと考え、

大阪の黄檗宗九島院

渡唐を願いながら果たせなかった龍渓禅師の思いに報いるため、中国四大霊場を画題に決めた。

本堂は六室からなり、それぞれに「五台山」「九華山」「峨眉山」「普陀山」の四大霊場と「黄河」「長江」の風景が描かれている。桂さんは、巧みな運筆で急峻な岩肌や轟音とともに流れ落ちる瀑布、静けさがしみ入るような山水の風景を描き分け、臨場感いっぱいに表現した。襖は通常のサイズより少し大きめの特注品で、鳥の子紙の上に雲肌麻紙を張り合わせることで強度を増す工夫を施している。

奥田住職は「永世にわたって伝える価値ある寺宝を描いていただいた。素晴らしい襖絵でご開山の霊を慰めることができる」と話し、襖絵が納められた本堂で笑顔を見せる。同院では、来年三月の彼岸法要で披露し、その後は希望があれば広く参観に応じたいとしている。

桂さんは平成六年、京都芸術大学大学院の留学生として来日し、日本画を専攻。岩絵の具を用いた日本画の技法にみせられたといい、中国画の伝統と日本画の技法を独自に消化、発展させる。阪神・淡路大震災で被災し大阪市内の仮設住宅で暮らしていた時に奥田住職と知り合い、今回の改修前にも本堂に襖絵を奉納した。

特に花鳥画を得意とし、日本でもこれまでに数回の個展を開いたほか、画集『桂上登花鳥画の世界』（日貿出版）も出版している。

桂さんは「制作にあたり四大霊場を取材した時は、風景を前に涙し震えた。絵は情で描くものだと思っているが、奥田住職に喜んでいただいてうれしい」と話しており、奥田住職も「これから寺院の襖絵などを精力的に手がけ日中友好の懸け橋となってほしい」とエールを送っている。

襖絵については九島院＝電話〇六（六五八三）二七二五＝まで。

檀信徒の皆さまへ

墓地無縁整理と塀の立て替え

平成十七年八月五日付けで無縁墳墓改葬広告を官報に載せました。該当の墓石にはその旨を標示した木札を付けています。お心当たりのお墓があれば、お寺までご連絡下さい。

また、墓地東側壁が老朽化し倒壊の危険があったので、建て替え工事をしました。表側塀と同様にし、上部に瓦を葺きました。工事費用の金三百四十六萬万円は寺院会計より支出しました。

ご開山龍渓禅師の喜び、誰よりも御本尊の喜びです！

○訃　報

総代・稲穂幹彦氏がさる十月二十五日にご逝去されました。氏は住職とは昵懇で勤務中学の同僚でした。平成三年七月二十三日より総代・世話人として当院の再建にお力添えを賜りました。慎んでご冥福をお祈りします。

年忌表（平成18年）

回忌	死亡年	回忌	死亡年
1周忌	平成17年	17回忌	平成2年
3回忌	平成16年	25回忌	昭和57年
7回忌	平成12年	33回忌	昭和49年
13回忌	平成6年	50回忌	昭和32年

年忌法要のご予約は早い目に！お寺でもできます。詳細はお問い合わせ下さい。

●慶祝・天皇家の結婚披露宴

１１月１５日、天皇家の長女、紀宮さまと東京都職員の黒田慶樹さんとの結婚式、結婚披露宴が東京千代田区の帝国ホテルで行われました。

結婚披露宴には、天皇皇后両陛下・皇太子ご夫婦をはじめ皇族、お二人の学友関係者ら１２０名が出席したささやかながら和やかなものでした。

石原慎太郎東京都知事が、来賓を代表して祝辞を述べ、乾杯の発声をしましたが、天皇皇后両陛下が出席者と同床に座られ、一般庶民の披露宴と同じ進行に驚くとともに、皇室に対してより親しげなイメージを持ちました。

娘を送り出す親の気持ちは、いずれも同じで、紀宮さまを見つめる両陛下の優しい眼差しは、慈愛に満ちたものでした。

先日拙院でも新婦を迎えましたが、新婦のご両親と新郎の両親では受け止め方にも差異があり、拙院では娘が一人増え賑やかになりました。その分、実家のご両親の寂しさはひとしおのことと思います。

娘との生活が長ければ長いほど、別れも辛くなるものです。紀宮さまは三十六年、内親皇としての公務を勤められ、両陛下をお助けされていましたので両陛下にとっては、身を引き裂かれる思いかもしれません。

嫁がれる朝、天皇陛下は「家族の絆は変わらないので、折々にいらっしゃい」とお声をかけられたそうですが、そのお言葉の奥には、皇室を離れ一般国民になられる紀宮さまが、皇室である実家への敷居の高さを思ってのことかと推察いたします。

お二人で力を合わせて温かいご家庭を築かれますよう、祈念いたしますとともに、このご結婚が契機となって、世の結婚しない女性に、家庭への想いを深くさせ、伴侶を得る努力を願ってやみません。

お　知　ら　せ

◎のぼり奉納の募集　１旗　金２千円

『南無観世音菩薩のぼり』を入れ替えます。１年間境内に掲げます。昨年同様お施主さんを募集いたします。為書きと施主名を墨書します。ご希望の方は寺務所まで、お声をかけてください。

奉納抄

○金弐拾萬円寄進（平成十七年十月二十七日）

稲穂信子さまより、逝去されたご主人のご冥福を祈り、ご供養にと喜捨されました。お寺のために有意義に使わせていただきます。厚く御礼申し上げます。

編集後記

▼また歳末がやってきます。年々、一年がたつのが早く感じられます。

▼産経新聞『朝の詩』で、自分が体験した全時間に対し、一年は一歳の子は一分の一、三十歳の人は三十分の一とどんどん小さくなるからとのっていました。

▼「光陰矢の如し」歳月は人を待ちません。日々を大切に精進していきたいものです。

▼今年は、拙院にとっては、とてもよい一年でした。後継者もできましたし家族も増えました。そして何より、念願の襖絵ができあがりました。

▼靖国問題をはじめ、日中両国の関係が芳しくありません。国家体制の違う両国が真に友好な関係を築くことは難しいものですが、せめて、庶民レベルでは良好な関係を結びたいものです。

▼入唐を念願した龍溪禅師も現在の日中関係を憂いておられることでしょう戌年がよき年になるよう祈念します。

墓地管理費のご納付をお願いします。墓参の折り、郵便振込でも結構です。

ご開山龍溪禅師の喜び、誰よりも御本尊の喜びです！